

## 日本胃癌学会助成による海外研修・学会参加報告記

(2025年9月23日～26日、延世大学セブランス病院およびKINGCA WEEK 2025)

京都第一赤十字病院 消化器外科 小西 智規

### 1. はじめに

このたび日本胃癌学会のご助成を賜り、2025年9月23日～25日まで韓国・ソウルの延世大学セブランス病院において手術見学の機会を得るとともに、26日には韓国胃癌学会（KINGCA WEEK 2025）に参加し、ポスター発表を行うことができました。本研修・学会参加を通じて、最新の胃癌、食道癌手術手技、そして国際的な学術交流の重要性を改めて実感する貴重な経験となりました。

### 2. 延世大学セブランス病院における手術見学（9月22日～25日）

#### (1) 病院・施設概要

延世大学セブランス病院は韓国を代表する最先端高度医療機関（2500床）であり、消化器外科領域においても国内外から多くの患者が集まる高い診療実績を有しています（胃癌手術1000件以上/年、食道癌手術150件以上/年）。これらを数少ないスタッフ、フェローで行っており一人あたりの執刀数が50-100例/年を超えていたる状況でした。手術室は最新鋭の設備で整えられており、見学時は1日に6件ほど胃癌手術が行われていました。

#### (2) 手術見学内容

今回の研修では大阪市立総合医療センターの久保先生、櫻井先生、大阪公立大学の石館先生とご一緒させていただき、9月23-24日に胃癌手術を見学することができました。

Woo Jin Hyung教授のフランスとのライブ中継でのRDG（丁寧に解説しながら2時間ほどで終了）やHyoung il Kim教授のda Vinci SPでのRDG（すでにSPで150例を超える執刀数とのことで定型化が進んでいました）に驚嘆しました。また同年代の若手のスタッフの先生の手術も見学させていただき、圧倒的に手技が上手で助手が看護師にも拘わらず安定して行われておりますます刺激を受けました。25日にはDae Joon Kim教授のRAMIEの手術を見学させていただく機会にも恵まれました。圧倒的な解剖への知識、理論、食道を牽引しない左反回神経周囲郭清のこだわりなど非常に勉強になりました。吻合法にもこだわりを持って、日本で多く普及しているCollard変法ではなく、食道胃管手縫い吻合(2層 層々吻合)を行っておられました。胸腔操作2時間、両側頸部郭清30分、腹部胃管作成1.5時間、吻合1時間で15時過ぎには終了しておりました。

#### 3D血管構築の活用/ICG活用

CT画像から作成された3D血管モデルを術中にda Vinciのコンソール(Tile pro)へ反映させ、解剖の理解と手技の正確性向上に応用されておりました(Hutom社)。これにより個々の患者に応じた血管走行の把握が可能となり、安全かつ合理的な郭清操作につながっています。

ました。また前日に腫瘍近傍に ICG 注入し、術中に Firefly で ICG 血流、リンパ流の確認をルーチンに行っており、より精度の高いリンパ節郭清を行っている印象でした。

### ロボット支援手術の洗練

ロボット手術はもはや routine の域に達しており、術者の操作は非常にスムーズで、郭清操作から再建に至るまで無駄のない動きが印象的でした。短時間で確実な再建が可能となっていました (RDG : 2 時間台、RTG : 3 時間台)。

### チーム全体の熟練度

執刀医のみならず助手、看護師との連携がシステムティックに行われており、チーム医療の完成度の高さに感銘を受けました。特に看護師さんが日本での専攻医やスタッフに匹敵するほどの技術を持った方もおられ、日本の数年後を予見させる環境がありました。

日本においてもロボット支援手術は胃癌、食道癌において広く普及していますが、圧倒的な症例/経験に裏打ちされた解剖への知識や洗練された技術を今回目の当たりにし、非常に刺激になりました。今後自施設での教育や実践に還元したいと考えています。

## 3. 韓国胃癌学会 (KINGCA WEEK 2025) への参加と発表 (9月 26 日)

### (1) 学会の概要

KINGCA WEEK は韓国胃癌学会が主催する国際学会であり、日本胃癌学会より参加人数は少ない (800 名ほど) とのことでしたがアジア諸国をはじめ欧米から多くの研究者・臨床医が参加していました。会場はソウル市内のロッテホテルで行われ、立ち見ができるほど活況で、活発な討論と国際的な交流が行われていました。

日本からも掛地吉弘教授が座長をお務めになられ、竹内裕也教授、宇山一朗教授が日本の食道胃接合部癌のエビデンスや、コンバージョン手術についてご発表されており、熱い議論が行われてきました。韓国の先生の発表で日本のガイドラインや取扱い規約が度々登場し、今でも日本の胃癌治療がベースになっていると誇らしく感じたとともに、今後もエビデンスを発信していく必要があると強く思いました。

### (2) ポスター発表

私は栄養のセッションで、自施設で取り組んでいる胃全摘患者さんへの在宅夜間経腸栄養の短期/長期の治療成績「Clinical impact of night home enforced enteral nutrition therapy following surgery for gastric cancers」についてポスター発表を行いました。他の演者の韓国、中国、インドネシアなど参加者から研究内容に対して質問やコメントをいただき、大変有意義な時間となりました。いずれも日常診療に直結する内容であり、また国際的に比較することで日本の立ち位置を再認識する良い機会となりました。

## 4. 総括

今回の研修と学会参加を通じて、以下の 3 点が強く印象に残りました。

### 1. 先進的技術の導入と実践

延世大学セブランス病院における洗練されたロボット手術は、今後の胃癌外科手術

の方向性を示すものであり、日本においても更なる普及・改良が必要と感じました。

## 2. 術式や手技の多様性と工夫

郭清操作や吻合法など施設ごとに異なる工夫があり、それらを比較検討することで自施設の術式改善に結びつけられることを学びました。

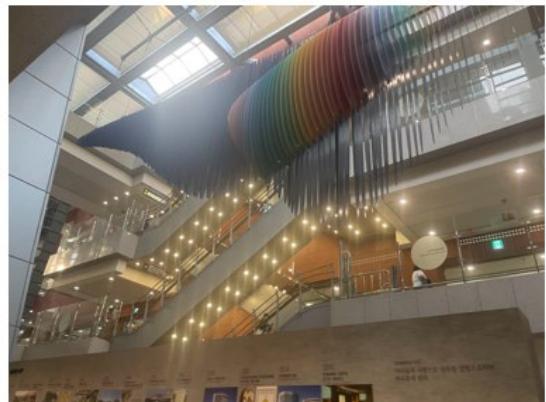
## 3. 国際的交流の重要性

ついつい日常診療で狭い視野に陥りがちであります、今回の学会参加を通じて、国際的な視野を持ち研究や診療を進めることの意義を強く実感しました。特に若手外科医にとっては、異なる国の医師と直接意見交換を行うこと自体が大きな刺激となり、今後の研究の方向性を考えるうえで重要な糧となります。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました日本胃癌学会掛地吉弘理事長、国際委員会竹内裕也委員長、および事務局の方々に心より感謝申し上げます。今後は本研修で得られた知見を日常診療に還元し、さらなる研鑽を積んでまいります。是非、このような素晴らしい魅力的なプログラムへのご支援が今後も継続されること切に願っております。



このような棟がもう一棟



ショッピングセンターのような病院です



創立140年



セブランス病院



Woo Jin Hyung教授と  
筆者(左) 小松先生 櫻井先生(大阪市立総合医療センター)  
石館先生(大阪公立大学) 久保先生(大阪市立総合医療センター)



Hyoung il Kim教授と  
小松先生 筆者(右)



Da Vinci SP手術 術野が全員看護師さん



3D血管構築を参考にしながらのナビゲーション手術



Dae Joon Kim教授と



Hyoung il Kim教授と  
マスターコースの先生方と集合写真



日韓の強い結びつきを感じました



ポスター発表